

二〇一三年九月二六日 開催

カナダ英語はアメリカ英語とどう違う!?

—世界で一番長い国境線の両側の英語

J・K・チエンバース

(執筆 矢頭典枝)

■講演者……J.K. Chambers (トロント大学教授)

■司会・解説・通訳……矢頭典枝

■使用言語……英語(適宜通訳あり)

講演要旨

我々は、遠くに住んでいる人よりも近くに住んでいる人と同じような話し方をする。これを社会言語学では「方言連続体 (dialect continuum)」という。しかし、国境線がある場合、「方言連続体」は分断されることがある。カナダとアメリカ合衆国は、世界で一番長い国境線を共有する。その国境は、カナダにとって、カナダ英語の独自性を保つ「レンガの壁」のような役割を果たす場合もあれば、「透かしスクリーン」のようにカナダ英語とアメリカ英語の同化を促す場合もある。

本講演では、カナダとアメリカの国境の両側における英語

の発音や語彙に関する調査の結果を概観した。主な調査地点としては、ナイアガラの滝の両側(オンタリオ州とニューヨーク州)、ブリティッシュ・コロンビア(B.C)州とワシントン州の国境地点、ニューブランズウィック(N.B)州とメイン州の国境地点である。

カナダ英語とアメリカ英語が異なる例として、まず *shine* の過去形の *shone* の発音が挙げられた。ナイアガラの滝の両側の調査では、カナダ側では九〇%以上が [ʃɒn]、アメリカ側では九〇%以上が [ʃɔn] と発音されることが地図を用いて示された。しかも、面白いことに、国境に接しているカナダ側のナイアガラ半島の方が、カナダの内陸よりも、カナダ的な [ʃɒn] という発音をしていることが指摘された。つまり、カナダの国境地点に住居するカナダ人は、カナダ英語の独自性を内陸居住者よりも強く主張する傾向がある。Chambers



チェンバース先生と矢頭先生を囲んで

教授は、これをカナダ人の“Bastion Mentality”（防壁的メンタリティー）と呼ぶ。これは国境地点が「レンガの壁」の役割を果たす好例であり、国境地点のカナダ人がアメリカ的な言語的要素に抵抗することを示す。同様の例として、カナダ側のNB州とアメリカ側のメイン州における「炭酸飲料」を表す語の調査も興味深い。カナダ的な語 pop の使用は、内陸部では九六％であるのに対し、国境地点の街では一〇〇％である（アメリカ的な語は soda）。

また、国境が「透かしスクリーン」の役割を果たし、カナダ英語の特徴がアメリカ側に影響している例も紹介された。例えば、「家での夕食」を意味するカナダ的な単語 supper、また lever のカナダ的発音 [ɪ] は、カナダ側の国境地点では bastion mentality が作用してカナダ的な話し方が強調されるが、アメリカ側の国境地点の町では、アメリカ内陸部よりもカナダ的な話し方が浸透している（アメリカでは各々 dinner、[e] が一般的）。

カナダ英語とアメリカ英語は、発音面では区別がつかず、近年では語彙面でもカナダ的な語のアメリカ化が進んでいる。しかし、本講演では、カナダ側の国境地点に住むカナダ人が、カナダ人としてのアイデンティティを強くもち、隣接するアメリカからの言語的な要素の侵入に抵抗する状況が明らかにされた。最後に、Chambers 氏は “Whether the border is



熱心に聴き入る受講生たち

physical or not, people express allegiance to 'their' side — and the way we speak is an important marker of who we are and where we come from.” (国境が物理的なものであろうとそうでなかろうと、人々は自分が所属する方に対する忠誠心を表す——そして、我々の話し方は、我々が誰なのか、どこから来たのか、を示す重要なマーカーとなっている)と



〈スライド写真〉 国境を挟んで、左がアメリカ、右がカナダ—その間に建っている家は両国にまたがる (Chambers 教授の講演のパワーポイントより)

締めくくった。

講演の様子

本講演は「カナダ研究入門Ⅱ」の授業の枠内で行われたため、Chambers 教授は言語学的な専門知識を持たない聴衆にもわかりやすいように、様々な工夫を施した。パワーポイント

トでは、カナダとアメリカの国境地点の写真——ナイアガラの滝やBC州とアラスカ州の国境地点など——が数多く映し出された。なかでも、ケベック州とバーモント州の間の、線が引いただけの国境にまたがる家の写真は聴衆の笑いを誘った。「この家の住人は、アメリカ側にある寝室で寝て、カナダ側のトイレに行くのです」とChambers教授。

世界的に著名なChambers教授の本講演の開催は言語学関係者に知られることとなり、当日は、言語学を研究する研究者や大学院生が県外からも来場し、熱心に講演に聞き入っていた。

JK: Chambers 教授紹介

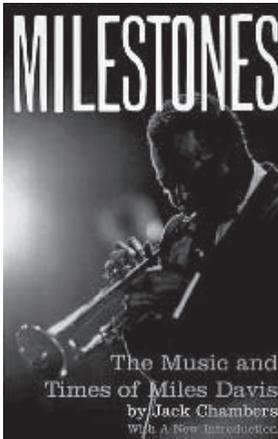
トロント大学言語学部教授。一九三八年オントリオ州生まれ。一九七〇年、アルバータ大学で博士号取得（一般言語学）。アメリカのLabov、イギリスのTrudgillと並び、社会言語学の三大重鎮の一人として知られる。カナダ英語研究の草分け。*Canadian English: Origins and Structure*（一九七五）の出版以来、カナダ英語および言語のバリエーションと言語変化に関する著作を数多く輩出してきた。特に、*Sociolinguistic Theory: Linguistic Variation and Its Social Significance*（一九九五／二〇〇三／二〇〇九）とTrudgillとの共著 *Dialectology*（一九九八）は、世界中の大学で社会言語学のテキストと

して用いられている。

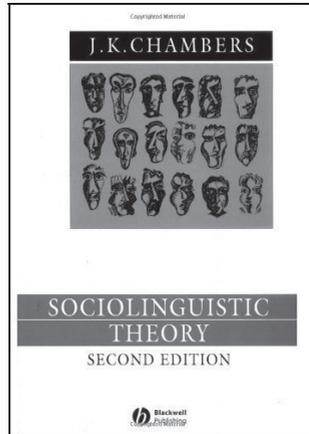
また、ジャズ評論家としても知られ、マイルズ・デイビスの伝記 *Milestones: The Music and Times of Miles Davis*（一九九八）など、ジャズに関する著作も多い。社会言語学ではJK、ジャズではJack——と出版の際はファーストネームを使い分けている。（詳細は <http://www.chass.utoronto>。



チェンバース先生



Milestones (1998)



Sociolinguistic Theory (2009)

ところで、日本カナダ学会編(二〇〇八)『史料が語るカナダ 1535-2007』の(モルソン・ビールのテレビCM「アイ・アム・カナディアン」)(pp. 292-293; 執筆・宮澤淳一氏)のなかで、「カナダ人ジョー」が、劇場の舞台上に登場し、観衆の前でカナダ(人)とアメリカ(人)の違う点を興奮しながら列挙するCMを解説している。このなかでジョーは、「カナダ英語とアメリカ英語は違う!」といくつかの例を挙げて訴えている。そのなかの三つの例は、実は Chambers 教授が一九七〇年代より研究してきた言語項目である。

まず、*about* という語をカナダ人が *ˈaɪəbʊt* のように発音するとアメリカ人が認識しているが、それは違う、とジョーは主張している。これは、*Canadian English* (一九七五)のなかで分析されている“Canadian Raising”と Chambers が名づけた言語現象から説明できる。*about* のなかの二重母音 /aʊ/ は、カナダ人が発音すれば、母音の出発点で舌が上ががり、「アウ」より少し「オウ」(「オ」は「ウ」に近い)のように発音される。アメリカ人は、このカナダ人のこの二重母音に敏感に反応し、舌が最も上がった状態の「ウ」のように誇張して捉えることがある。Canadian Raising が起きているのは、その他、*house* ‘mouth’ *couch* など、この二重母音のあとに無声子音がくる語である。

次に、ソファのことを指すのにカナダ人は伝統的に *ches-*

terfield」という語を使ってきた点である。一九八〇年代に Chambers 教授がトロントからナイアガラにかけてのオンタリオ湖西側（いわゆる the Golden Horseshoe）で行なった調査では、chesterfield という語は、若い世代によって使われなくなり、couch という語にとっかわっている、という結果が出ている。

三つ目は、アルファベットの最後の文字「z」をカナダ人は [zed] と発音する、という点である。この点について、Chambers 教授は一九七〇年代よりオンタリオ州南部において継続的に調査してきた。その結果、カナダ人の子供たちはアメリカの幼児番組などの影響を受けて、アメリカ人のように [zɛd] と発音するが、大人になつてからカナダの伝統的な発音である [zed] に変える傾向がみられる、というものである。これは、「我々はアメリカ人とは違う」というカナダ人のアイデンティティを示す言語現象として捉えられる。